

令和7年度一般推薦入学試験問題

018

専門課題 小論文
(初等教育コース環境教育専攻)

[注意]

1. 監督者の指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
2. 監督者の指示に従って、解答用紙に受験番号と氏名を記入してください。
3. この冊子は問題用紙1枚と下書き用紙1枚です。この冊子と別の解答用紙は1枚です。印刷の不鮮明な箇所などがあれば申し出てください。
4. 解答は解答用紙の指定された場所に記入してください。
5. この冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで問題に答えなさい。

私は保育・福祉の専修学校でどんぐりを使った「生活文化」の授業をここ数年行っている。どんぐりは、ブナ科のナラ類やカシ類の実の総称だ。京都は寺社や大学構内などにたくさんの種類の樹木が植えてあるので、どんぐりの仲間もすぐに十数種類ほど集めることができる。このどんぐりを教室に持ってきて、全部ごちゃまぜにして学生に与える。学生には、何種類のどんぐりが入っているか教えない。これを同じ特徴を持つ仲間同士に分けて、めいめい好き勝手に名前をつけさせるという作業をやる。四〜五人で組になって行わせるとなかなかユニークな名前をつけるグループもあり、楽しい授業になる。このとき、たいへん興味深いのは、どんぐりの正確な種名をほとんど知らない学生たちが、ほぼ正確に分類はできることである。つけられた名前からも、それぞれのどんぐりの形態的特徴をうまくつかんでいる様子うかがえる(図1)。つまり、種名を同定することなしに、分類する作業はできるのだ。

学生が見事に分類できた理由について、少しタネを明かす必要がある。じつは、仲間分けをさせる前に、彼らには、どんぐりのスケッチをしてもらっている。このスケッチの授業が学生の分類能力を高めるのだ。スケッチは、はじめにどんぐりを見ずに書かせる。すると、図2の左のようなどんぐりが描かれる。これは、一般の人が持つどんぐりのイメージだが、形はどんぐりというよりもマタタビの実にずっと似ている。一回目のスケッチの後に、スライドを見せたり、板書をしながら、どんぐりの形について、くわしく説明をする。どんぐりの尖った先端は雌しべの柱頭(花粉がつくところ)のなごりであるとか、先端から横へ流れるカーブをどんぐりの「肩」といって、この曲線の具合で各種のどんぐりのシルエットが決まるといった解説をする。その上で、今度はどんぐりを実際に見ながら、二回目のスケッチをさせる。すると、先ほどとはまるで違う絵を描いてくれる。ほとんどの学生は、私が見て、なんとという樹種のどんぐりか同定できるように描いてくれる。これは、学生たちがどんぐりを生物学的に見る目(私は「どんぐりアイ(目)」といっている)を身に付けたからで、これがあると、どんぐりの分類能力が格段に上がるのだ。

ある年に同様の仲間分けをしていると、例年に比べて、学生の分類が下手なことがあった。その学年だけが劣っていると思われる要素はほかになく、はじめは不思議だったのだが、カリキュラムの都合でスケッチに十分時間がとれないまま、仲間分けの授業をしていたことに気づいた。スケッチだけでなく、どういふうにどんぐりを見るかという解説も不十分だったために、どんぐりアイを鍛えていなかったのだ。違いがわかるようになってもらうためには、そういった誘導も重要なかもしれない。

「先生、どんぐりって、こんなにも種類が豊富で個性豊かなんですね。」

分類し終えたあとに、多くの学生からこのような感想をもらう。

私が教壇に立って、さまざまどんぐりを見せながら、

「このなかには、十数種類ものどんぐりが含まれていますよ。」

と話して説明をするだけでも、どんぐりは多様だということを伝えることはできる。しかし、学生が、自分自身で見分けられるようになって、どんぐりが多様だということを実感するのとは、雲泥の差があると思われる。

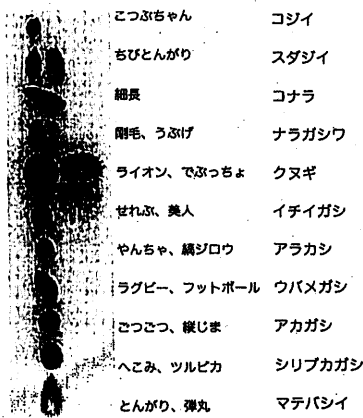


図1 学生が行ったどんぐりの分類
(注) 自分たちのつけた名前(左)に対応して見事に種名(右)が重なった。

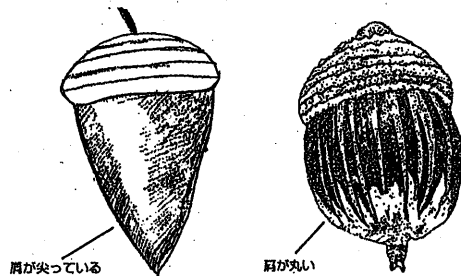


図2 どんぐりのスケッチ
(注) どんぐりを見ないで描いたもの(左)と、どんぐりの特徴を知ってから描いたもの(右)。いずれも同じ学生が描いた。

神松幸弘「生物多様性を受け入れる生き方、考え方とは」(一部改変)

収録:阿部健一(編)「生物多様性 子どもたちにどう伝えるか」2012年、昭和堂

問題:あなたがこれまで経験した中で、筆者の述べる「実感」を得られた学習活動を具体的に挙げ、学習活動における体験の意義についてあなたの考えを述べなさい。なお、学習内容は生物の分類に限る必要はない。